

連載 プロマネの現場から 第 73 回 富永仲基の思想に学ぶ

蒼海憲治（大手 SI 企業・金融系プロジェクトマネージャ）

日本には古来、「百説」という言葉がある。なんでも 100 を越すと、あるレベルを超える、ということを表している、と、知的生産の技術研究会編の『知の現場』の中で、久恒啓一さんが語っています。当の久恒さんは、ここ数年、「人物記念館」巡りにはまっていると、例を挙げていられています。週末を利用して、「人物記念館」を、毎年 50 館ほど訪ねているそうですが、100 館訪ねてつくづく思ったのは、「日本人はなんて偉いんだろう」ということ。さらに、300 館超えた現在は、久恒さんにとっての聖地巡りとなっているそうです。

自分なりに、百説の目標をいくつか持つてみることは、日々の時間を味方にし、人生を充実したものにする意味でも、とてもよい試みだと思っています。

ところで、みなさん「墓マイラー」をご存じでしょうか？

「人物記念館」巡りではないのですが、よく似たものに、世界中の偉人が眠る地、偉人のお墓をめぐる「墓マイラー」という人たちがいます。最近、この「墓マイラー」が増えている、というニュースを目にしました。偉人のお墓を参り、ただ一言、「ありがとう」の言葉を伝える。生前であれば、会うことがかなわなかったであろう世界の偉人に対面することができます。これが、「墓マイラー」が増えている原因だと思います。

その「墓マイラー」というわけではないのですが、私も、先日、大阪に帰省した際、四天王寺に足を運びました。四天王寺の立派な院内を巡り、極楽浄土の庭の桜を愛でながら、抹茶と名物の釣鐘まんじゅうをいただきました。その後、出来たばかりのアベノハルカスにも上ったのですが、今回の目的は別にあります。それは、富永仲基のお墓参りをすることでした。

谷町線の四天王寺前駅を下車し、四天王寺の反対側の、太平寺の手前を西へ向かいます。そのかたちが蛇に見えたという口縄坂を降って、松屋町筋の左手に曲がって 2 つ目に西照寺さんがあります。ここの本堂の右奥手に、富永仲基のお墓がありました。ところが、このお墓は、正確にはお墓ではなく、明治に建てられた「富永仲基の招魂碇」でした。

なぜ、お墓ではなく、供養碑だったのか。それは、富永一族の墓碑は多数残っているのですが、その中に仲基本人の墓はすでになくなっており、仲基の母の墓の中に仲基の記述が残っているだけのためです。そのため、この供養碑も、明治になって、仲基が再発見されてから、新しく建てられたものでした。

そのラディカルな思想により、仲基は、所属していた学問所であった懐徳堂を破門され、また、富永一族からも勘当され、お墓は残っていないのです。その業績に比べて、あまりに小さな招魂碣を見ながら、その理不尽さを感じつつ、感謝の気持ちで手を合わせました。

富永仲基は、江戸中期の正徳5年(1715年)に生まれ、延享3年8月28日没(1746年10月12日)に没した、大坂の町人学者です。父親が作った懐徳堂の学風である合理的・批判的精神を持って、その思考を推し進め、儒教・仏教・神道への批判を展開します。あまりに徹底していたため、懐徳堂から破門されるほどでした。この批判の徹底ぶりに驚くのですが、現在では、その論理的な思考法そのものが、思想そのもの以上に評価されています。

この仲基を再発見したのは、内藤湖南ですが、湖南の著作である『先哲の学問』の中に、大正14年4月5日に行われた、「大阪の町人学者富永仲基」と題した講演記録があり、仲基の業績を紹介しています。

富永仲基の著作には、『出定後語(しゅつじょうこうご)』と『翁の文』と『説蔽(せつへい)』の3つがあるといわれていますが、最初の作品であった『説蔽』は失われており、『翁の文』も、大正13年に発見され、内藤湖南自身の手により出版された、といます。したがって、江戸時代中期においては、『出定後語』しか流布していなかったようですが、この佛教批判の書に対して、本居宣長は『玉かつま』にて、「見るに目さむるこちする事ども多し」と激賞しています。

内藤湖南も、富永仲基は、大阪出身の第一流の天才、そして、日本における第一流の天才である、とべた褒めです。その理由は、仏教研究として一流であるだけでなく、歴史研究の方法論として一流であった点にある、といます。

「学者の中で非常な新しい思いつきがあつて、そうして新しいことを何か研究して生み出す人は相当にあります、しかし自分で論理的研究法の基礎を形作つて、その基礎がきわめて正確であつて、それによつてその研究の方式を立てるといふことは、いたつて日本人は乏しいのであります。

それは仁斎でも徂徠でもみな相当えらい人ですが、日本人が学問を研究するに、論理的基礎の上に、研究の方法を組み立てるといふことをしたのは、富永仲基一人といつてもよろしいくらいであります。その点に、われわれ非常に敬服するのであります。」

この特別な方法として、一つ目の原則として、「加上」の原則というのものがあつて、こ

の原則を立てたことを高く評価しています。

それでは、この「加上」の原則とは何か。

「元何か一つ初めがある、

そうしてそれから次に出た人がその上のことを考える。

またその次に出た者がその上のことを考える。

だんだん前の説がつまらないとして、後の説、自分の考えたことを良い

とするために、だんだん上に、上の方へ方へと考えていく。

それでつまらなかった最初の説が元にあって、それからだんだんそのえらい話は後から発展していったのであると、こういうことを考えた。」

つまり、「加上」の歴史的過程では、すべてが相対で、絶対の権威というものはない。孔子の仁も、王道も、絶対に正しいのではない。しかし、「加上」の原則のおかげで、江戸時代中期であれば、儒教・佛教・神道の三教という当時の権威や、孔子・孟子・墨子・荀子などすべての教えを、等しく一説として捉えることを可能としたといえます。

二つ目として、「異部名字難必和会（いぶみょうじなんひつわかい）」の原則というものがあります。

「根本のことがらは一つであっても、いろいろな学問の派ができますと、その派その派の伝えるところで、ひとつの話がみんな違って伝えられてくると、それを元の一つにかえすということはよほど困難である」ということを指摘したこと。

ある説をもととして、複数の説が派生した場合、後の歴史家や思想家は、複数の説のうち、どれか一つを正しく、残りは誤りだとして考えようとするが、そんなことの見極めは困難である、と指摘しました。

三つ目として、「三物五類立言之紀（さんぶつごるいりつげんのき）」の原則があります。

文献研究において心得るべきこととして、「言有三物」として、「言有人」「言有世」「言有類」があるといえます。「言に人有り」とは、同じことでも、人によって言い方、解釈が異なること。「言に世有り」とは、時代によって言葉の意味も発音も用例も異なること。「言に類有り」とは、言葉を五類に分けて、時代によって意味が変わることを押さえて研究をする方法を編み出しています。

このように、学問を科学的に組織だった方法で考えることが、現在、富永仲基から学ぶ第一のことだと思えます。

ところで、この「加上」の原則から連想することに、プロセス改善活動があります。

システム構築プロジェクトにおいてプロセス改善活動を、明確に位置づけてから、すでに7年余が経ちます。プロジェクトの本体活動と関連づけて、倦まず弛まず続けていますが、その歩みの中では、「365歩のマーチ」ではないですが、「3歩進んで2歩下がる」ほどではないにせよ、「3歩進んで1歩下がる」ところがあります。

その大きな理由は、1つ1つのプロセスは、深化・高度化しているのですが、プロセス間の連携・プロセス間の整合性に課題があります。

たとえば、CMMIでいうレベル2相当の管理系プロセスには、「プロジェクト管理」「品質保証」「問題解決」「測定」「構成管理」の5つがあります。このうちの1つである「測定」プロセスをとって見た場合、何を「測定」するか、「測定」した数値をどう分析・評価するかは、「プロジェクト管理」でいうプロジェクト目標から決まるとともに、その他の「品質保証」「問題解決」「構成管理」等の各プロセス毎の目標から決まります。その整合性を図った上で、標準の規定をするのですが、実際に使えるものにする中で、日々改善事項が生じているのが実情です。

冒頭にあげた「百説」ではありませんが、プロセス改善継続の結果、プロジェクト標準の改訂が100版を超えても営々と続く組織作りに取り組んでいきたいと思っています。

(参考図書)

内藤湖南『先哲の学問』(筑摩叢書) 1987年刊